

周辺のみどころ

安土山の西方にはかつて存在した内湖のうちただ一つ今も残る西の湖がある。ヨシを使った産業や漁労など、内湖とともに生きる人々の暮らしを現したのものとして、「近江八幡の水郷」が重要文化的景観に選定されている。

また安土山の南西の台地上にはかつて城下町が広がっていたが、その西半部にあたる大字常楽寺の北端には中世から港が存在した。現在は港としては使用されず、公園として整備されているが、かつての船入の痕跡が今でも残っている。



常楽寺港の船入跡



【アクセス】

- JR 琵琶湖線安土駅下車、徒歩約20分。

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】
(関連文献/関連施設)

- 滋賀県立安土城考古博物館 Tel. 0748-46-2424
- 滋賀県安土城郭調査研究所編『図説安土城を掘る』サンライズ出版
- 滋賀県安土城郭調査研究所編『安土城・信長の夢』サンライズ出版

安土城跡

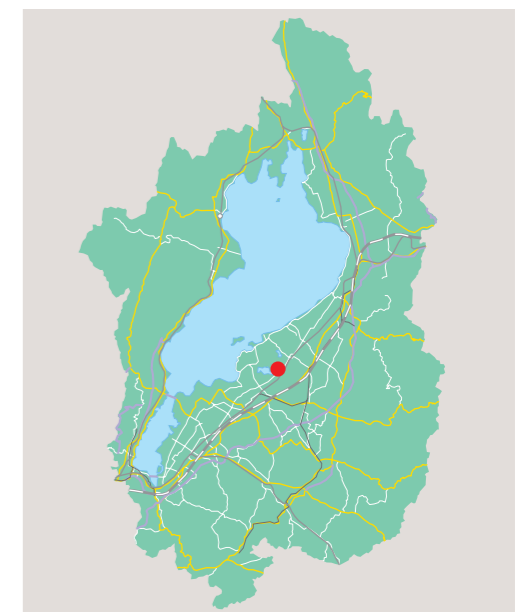
蒲生郡安土町下豊浦・東近江市南須田ほか



安土城と城下町の遠景

天下統一を目指す織田信長が築いた安土城は、高石垣と高層の天主を持つ、それまでにはなかった豪壮華麗な城であり、琵琶湖の内湖に突き出た安土山にそびえ立つ水城でもあった。

信長は近江支配の仕上げにあたり、湖岸の要地に城を築かせ、琵琶湖を中心とした交通・流通を面的に支配した。明智光秀の坂本城、羽柴秀吉の長浜城、織田信澄の大溝城、そして自身の安土城。これらは中世以来の港を城下に取り込み、街道が城の傍を通るなど、琵琶湖支配という目的のもとに築かれた。このような琵琶湖の支配は、信長の手で歴史上初めて実現された。安土城は天下統一の拠点であり、琵琶湖支配の要でもあった。





搦手口で見つかった溝状遺構

安土城跡

所在地 蒲生郡安土町下豊浦・東近江市南須田ほか

安土城の歴史

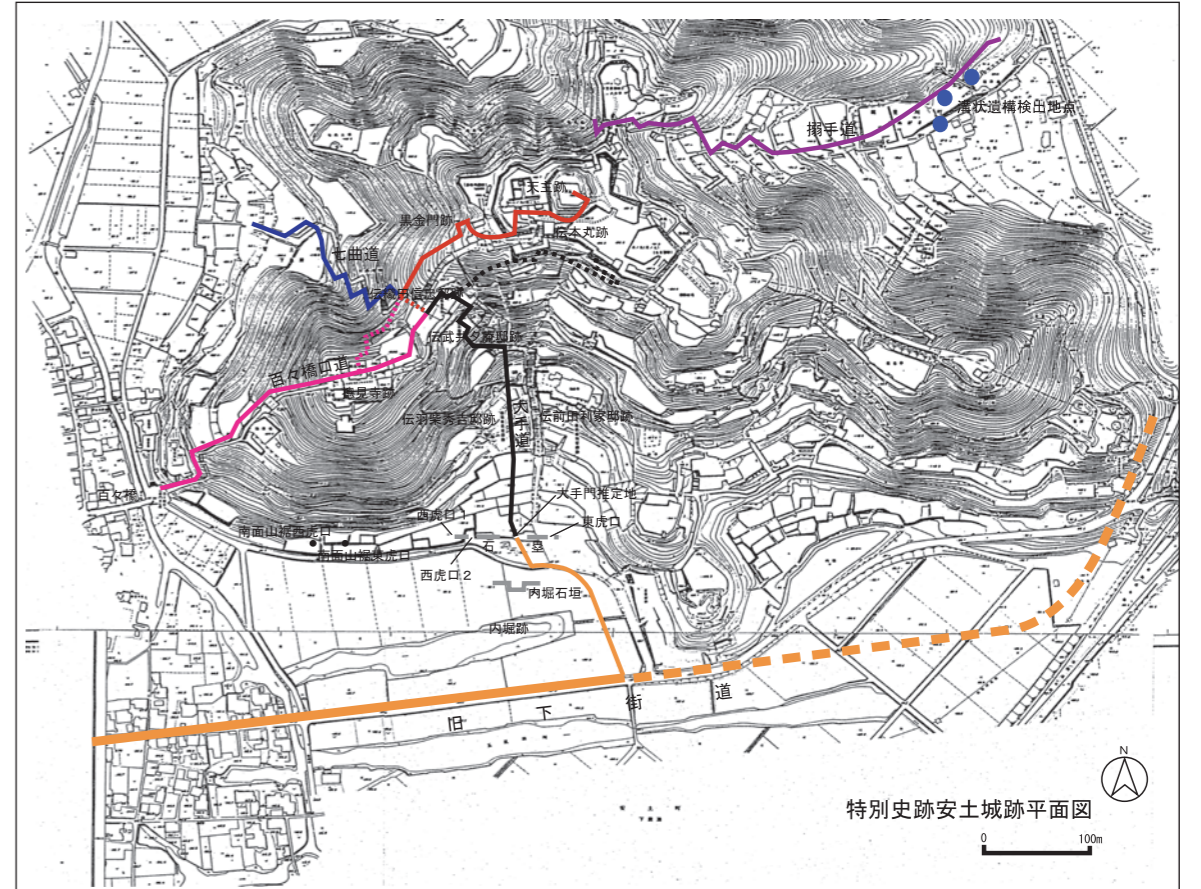
安土城の築城は天正4年(1576)に始まる。築城開始から三年後の天正7年には天主が完成して信長が移り住み、信長の居城としての安土城はこの時点で完成したといえる。しかし天正10年に本能寺の変で信長が殺されると、城は明智光秀の手に渡り、光秀が羽柴秀吉に敗れた後、天主・本丸は焼失してしまう。それでも安土城は織田氏の天下を象徴する城として、信長の後継者であることをアピールするため、信長の息子信雄や孫の三法師が入城を果たしている。しかし天正13年、小牧長久手の戦いで信雄が秀吉に屈すると織田氏の天下は終焉を迎え、城はその役目を終えて廃城となる。その後江戸時代を通じて信長が城内に建てた惣見寺がその菩提を弔いながら、現在まで城跡を守り続けている。

安土城の概要

安土城は琵琶湖東岸にそびえ立つ標高198

mの安土山に築かれた。それまでの中世城郭とは異なり、全山が石垣に覆われ、高層の天主を持ち、中心部の建物の屋根には瓦が葺かれるという、まさに近世城郭の先駆けといえるべき城である。その一方で、平成元年(1989)から開始された発掘調査によって、直線に延びる大手道や、大手周辺の複数の虎口など、近世城郭の先駆けという言葉では片付けられない特殊な構造が明らかとなった。

また、現在安土山の周辺は田んぼに覆われているが、それは戦中戦後の干拓によってであり、それまでは山の南面を除く三方が内湖に覆われていた。『信長公記』には信長が琵琶湖を通過して安土へ帰城したことが記されており、城から直接湖へ出るための船入の存在が想定されていた。船入そのものは未確認であるが、発掘調査では内湖と接していた搦手道の山裾部分で、船が通れるように浅瀬を掘った溝状遺構が発見されている。またここからは荷札木簡が見つかり、搦手道へ



特別史跡安土城跡平面図



内堀石垣と桐木



荷札木簡

船を使って物資の搬入が行われたことがうかがえる。

一方安土山の南面には、現在でも琵琶湖につながる内堀の痕跡が見られるが、安土城があったところは、これがさらに大きく大手の東西石塁まで広がっていると考えられていた。発掘調査では大手の東西石塁から南に44m下がった地点から、基礎に桐木を据えた石垣が

検出された。桐木は堀など水際の軟弱地盤の上に石垣を築く際に見られる技法で、このように調査で堀の石垣が発見されたことで、内堀の存在とその位置が確認された。内堀は石塁までは広がらず、石塁の南面には陸地が広がっていたのであり、これも安土城の特徴の一つとなっている。